



No. 71

The University of Tokyo Forests News 科学の森ニュース

September 10, 2015

発行：東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林

北海道演習林が2014年度林業遺産に選定されました

北海道演習林

2013年度の岩樟園クスノキ林（樹芸研究所）、浅間山（千葉演習林）に続き、北海道演習林が「天然林施業実践の森」として日本森林学会の林業遺産に選定されました。北海道演習林は1899年に設立され、天然林の施業・経営実験に取り組んできました。1958年以降は「林分施業法」に基づき、択伐を基調とした森林経営を事業的規模で継続しています。日本において天然林施業を長期間、大規模に実証した森林経営は他に類例がなく、時々の時代背景のもとで行ってきたその多様な展開が歴史的・技術的に顕著な価値を有すると認められました。



択伐施業が行われている北海道演習林の天然林

神社山自然観察路 春季一般公開

北海道演習林

2015年5月31日(日)に演習林職員がガイドを務め、午前の部・午後の部あわせて35名を神社山にご案内しました。

午前中は小雨まじりで雨具を着用しての散策となりましたが、天候は徐々に回復しました。午後には晴れ間ものぞき、野鳥のさえずりをかき消すようにエゾハルゼミの大合唱も始まりました。

森の中では、カツラやキタコブシの香り、アサダの葉の手触り、ニガキの苦味など、樹種の特徴を五感で感じていただきました。また、時期的に咲いていない樹木の花やキハダの鮮やかな黄色い内樹皮など、その場で見られなかったものはタブレットPCを使い解説をしました。



神社山自然観察路で演習林職員の説明を聞く参加者

初夏の雁坂峠と山小屋体験

秩父演習林

2015年6月6日(土)から7日(日)に、全学体験ゼミナール「春の奥秩父を巡る」の第二回現地講義を実施しました。第一回の現地講義では人里に近い低山・武甲山に登ったのに対し、第二回では古くから秩父と山梨を結ぶ峠道として利用されてきた雁坂峠に泊まりがけで行ってきました。2日間で標高1,000m付近から標高2,082mの雁坂峠、さらには標高2,289mの雁坂嶺に登って帰ってくるという行程です。大きな標高差があり、山地帯から亜高山帯までの植生の変化を観察しながら原生的な自然を体験しました。夜は雁坂峠付近の雁坂小屋に泊まり、夕飯は学生たちが分担で持って上がった食材でカレーを作りました。本格的な登山や山小

屋が初体験の学生も多く、貴重な体験となったと思います。



カレーを作る学生たち

公開森林実習を実施しました

生態水文学研究所

生態水文学研究所では、2015年6月17日(水)から19日(金)の3日間、他大学の学生を対象にした「公開森林実習(森林と土砂と溪流の実習—山から川に流れ出る土砂を測ろう—)」を実施しました。本実習は、同研究所で、ほぼ同期間に実施された本学農学部の「森林保全学実習」の現地実習と重複させる形で実施されました。公開森林実習生である愛知工業大学の学生1名は、森林保全学実習生である本学学生7名と共に、量水堰堤の静水池に堆砂した土砂の計測と排出、土砂量の集計、治山堰堤設計のための溪流測量を行いました。公開森林実習生は、初対面の本学学生に戸惑いながらも、本学学生と連携して実習プログラムを着々とこなし、最終的には、「所属大学では学べないことを学べた」と満足された様子でした。



本学学生と共に静水池の土砂を排出する
公開森林実習生

この春、東京大学演習林にフランスから2名の学生がインターン生としてやってきました。フランスの大学生は就職する前にインターンシップに参加し、職業体験を積むのが普通です。2人は東大演習林（日本）でどのようなことを経験したのでしょうか？インタビューしてみました。



ローレル シャピュイさん
Laure CHAPUIS
クロード・ベルナル・リヨン
第1大学の学部生。4～6月の間、
秩父演・田無演で研修。好きな
アニメは「BLEACH」。

Q1. どうして東大演習林でインターンをしたと思ったの？

森林や微生物に興味があり、その両方に関係している「樹病学」の分野にインターンしようと思いました。東大演習林の山田先生が樹病学の専門ということが分かり、先生とコンタクトをとってインターンに来ることになりました。日本の漫画やアニメが好きで、日本に興味があったことも理由です。

Q2. フランスでは何を勉強をしていますか？

フランスでは農学全般を勉強していますが、さまざまな実習をする中で、特に植物病理学に興味を持っています。

Q3. インターンで印象に残っていることは？

病変部から菌を分離し、それを接種して病気になるか、複数の菌がお互いの成長を抑制するかなどの実験をしたのが印象深いです。

Q4. 日本に来てみて面白いと思ったことは？

鎌倉で寺社や大仏を見たのが良かったです。京都の金閣寺にも行く予定です。



ノルウェン ルトキンさん
Nolwenn LE TOQUIN
ストラスブール水環境工学校の
大学院生。5～7月の間、秩父演・
生水研・教研セで研修。好きな
アニメは「ハウルの動く城」

Q1. どうして東大演習林でインターンをしたと思ったの？

自然な河川を対象にした水文や水環境の研究現場を見たいと思い、「Ecohydrology」や「Japan」をキーワードにしてインターネットで検索しました。元北海道演習林長の芝野先生にコンタクトをとったところ、芝野先生がご退官前のタイミングでしたので、浅野先生達を紹介してもらいました。

Q2. フランスでは何を勉強をしていますか？

フランスでは、大きな河川や都市河川の水環境全般について勉強しています。上水・下水工学についても勉強しています。

Q3. インターンで印象に残っていることは？

生態水文学研究所の水位観測所でのチャート紙の交換テクニックやポイントゲージを使った水位計測が印象的でした。

Q4. 日本に来てみて面白いと思ったことは？

寺、神社、温泉。お風呂の温度調節、追い炊きなど先進的な機能も面白いと思いました。

演習林のイベント情報

詳細はホームページをご覧ください。各地方演習林にお問い合わせください。

【9月】

- 7-8日 体験活動プログラム「癒しの森の森林管理」☆（富士）
- 9-11日 体験ゼミ「伊豆に学ぶ（夏）3」☆（樹芸）
- 11-13日 体験活動プログラム「伊豆の体験活動
—南伊豆という一地域との連携に学ぶ—」☆（樹芸）
- 20日 シデコプシの会「案内人・補助者スキルアップ講習会」◆（生水研）
- 29日～10月2日 教室系技術職員研修「森林野生動物調査法」◆（秩父）

10-11日 体験ゼミ「秋の奥秩父を巡る」☆（秩父）

- 14日、17日 温室特別公開日（樹芸）
- 24日 体験ゼミ「危険生物の知識（秋編）」☆（千葉）
- 24日 秩父演習林ガイドツアー「カエデの見分け方」（秩父）
- 29-30日 技術職員等試験研究・研修会議◆（富士）
- 31日～11月1日 体験ゼミ「秋の奥秩父を巡る」☆（秩父）

【11月】

- 下旬 公開講座「林業遺産、岩樟園クスノキ林を訪ねて」（樹芸）

凡例…無印：一般向け ☆：学生向け ◆：その他
(<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/>)

- 【10月】
- 3日 東大教職員向け特別ガイド「きのこに親しむ」◆（富士）
- 3-4日 せと環境塾（生水研）
- 4日 神社山自然観察路秋季一般公開（北海道）

科学の森の動植物紹介

サンショウ
ミカン科サンショウ属
学名： *Zanthoxylum piperitum*

富士癒しの森研究所

「小粒でぴりりと辛い」、あの山椒です。実や葉に独特の芳香があります。北海道から九州まで広く分布しますが、富士癒しの森研究所のある山中湖村近辺にも多く自生します。山中湖村では郷土料理として、新芽を佃煮にします。5月頃、まだ新しい新芽をたくさん採り（少しでも大きくなってしまったものを採るとガサガサした食感になってしまうので注意）、鍋で醤油、酒を沸騰させて少しずつ新芽を入れた後、砂糖を加え煮つめます。サンショウの風味が爽やかな佃煮で、ご飯が進みます。



青い未熟果の果皮を乾燥させると調味料の粉山椒になる

コラム

薪ストーブと健康の関わり

田無演習林 安村直樹

日本の木材需要に占める薪炭の割合は1%程度と諸外国に比べ小さいですが、今後は薪炭需要の拡大が見込まれます。かつて炊事や採暖用として多く使われた薪炭は、所得が増えるにつれて電気や灯油、ガスに代わられる形で需要が減少しました。ところが所得と薪炭需要の関係は1990年頃を境に一変し、所得の伸びを上回って需要が増えるようになっていきました。これを経済学では薪炭が劣等財から奢侈（しゃし）財に変化したと説明します。需要拡大が見込まれる背景にはこのような薪炭需要の構造変化があります。さて、世界保健機関によれば大気汚染による全世界の死亡者数は年間700万人、全死亡者数の1/8に及ぶなど、大気汚染は健康に深刻な影響をもたらします。わが国もその例外ではなく、拡大の見込まれる薪炭の利用には大気汚染対策が重要です。対策の一つに薪ストーブからの大気汚染物質の排出量を規制する、排煙規制があります。外国製に比べ国産薪ストーブの性能が見劣りするわが国にとってニュージーランド（NZ）の取組が参考になります。NZは2005年、工業規格（AS/NZS）に排煙規制を定めました。当初半数以上が不適合であったNZ産薪ストーブの多くは改良を経て適合となりました。その後2011年改正で欧米規格がAS/NZS相当として認められ、性能の優れた欧米産薪ストーブが利用可能となりました。競争力の乏しい幼稚産業であったNZ薪ストーブ産業は、保護育成期間ともいえる改正までの6年間で技術向上を果たし、欧米産薪ストーブに比肩する競争力を得たといえます。こうした取組の結果、NZでは大気質が改善の傾向にあります。

参考：

永田信（2015年11月刊行予定）「林政学講義」，東大出版会。
安村直樹（2012）薪ストーブと健康，木材情報 250：9-12。

科学の森ニュース（The University of Tokyo Forests News）

第71号（No. 71）

発行日 平成27年9月10日

発行人 富樫一巳

編集人 後藤 晋

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林広報情報委員会

TEL 03-5841-5497 FAX 03-5841-5494

E-mail mori2015@uf.a.u-tokyo.ac.jp